

アトリエ 琉游舎 だより 62号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2019年9月25日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

支度と成熟の秋

- 実りの秋とは言うものの、秋は広葉樹が葉を落とし草が枯れるなど生きものが冬支度に入る季節です。一方秋は稲の穂が頭を垂れ穀物や果物が実る成熟の秋でもあります。
- 立秋の頃あれほどうるさかった蝉の声もいつの間にか聞こえなくなりました。夜の賑やかな虫たちの合唱も、しばらくするといつの間にか聞こえなくなってしまうでしょう。
- 秋は花が咲きそして枯れ、果樹は実った後は落ちるように生き物にとっては最盛期から衰亡まで、成熟から冬を乗り切る支度へと慌ただしい季節なのかもしれません。
- それぞれの生き物が各々の摂理に従って成熟の秋を迎え、同時に厳しい冬を乗り切る支度をしている時、暢気者の人間は実りの秋を満喫し食欲の秋に忠実に穀物や果物をただただおいしく頂いています。
- 人間以外の動物は食料のなくなる冬に備えて、ありったけの食料をお腹の中に詰め込みます。食いだめが出来るようにあらかじめDNAにセットされているのでしょうか。その名残が同じ哺乳類の人間にとっては食欲の秋なのかもしれません。
- 私は秋にかぎらず体にも頭にもお腹にもいろいろとため込んで成熟の毎日を過ごしたいと思っています。「読書の秋」「収穫の秋」「瞑想の秋」「映画の秋」「会話の秋」琉游舎は成熟に向かって日々支度の毎日です。お待ちしております。

木 金 土 日

10月のスケジュール

月	火	水	木	金	土	日
30	10月1日	2	3 映画会 13:30	4	5	6 写経会 13時半
7	8 読書会 13:30	9	10 映画会 13:30	11	12 詩話会 13時半から	13
14	15	16	17 映画会 13:30	18	19	20
21	22 読書会 13:30	23	24 映画会 13:30	25 居酒屋の会 16時から	26	27
28	29	30	31 映画会 13:30	11月1日	2	3

写経会
10月6日(日)
13時半から

読書会
10月8日(火)
10月22日(火)
13時半から

詩話会
10月12日(土)
13時半から

居酒屋の会
10月25日(金)
16時から

映画会
毎週木曜日
13時半から

鎌倉時代の随筆家吉田兼好の言葉に「友とするに悪しき者七つあり 一つには高くやんごとなき人 二つには若き人 三つには病なく身強き人 四つには酒を好む人 五つにはたけく勇める兵 六つには虚言する人 七つには欲深き人」注1とあります。私は酒は大好きで毎晩呑んでいます。無病息災でランニングも山登りも人並み以上に速く走り登る自信があります。私は嘘をついたことがありませんといったとたんもう私は嘘をついています。大変欲深く明日は今日よりもっと楽しく暮したいと常に思っています。七つのうち四つも当てはまるようでは私は兼好さんのお友達にしてもらえそうもありませんね。続いて彼はこうも言っています。「よき友三つあり 一つには物くるゝ友 二つには医師 三つには智恵ある友」これは確実にどれも当てはまりません。ものをくれる人は大好きですがあげたくても私にはあげるほどの持ち合わせがありません。知恵と猿知恵の区別が未だに私にはつかないのです。もちろん医者資格は持ち合わせていません。

自分自身が「悪しき友」の典型で「よき友」にはとうていなれない腹いせで言うわけではありませんが、私は兼好さんがあげた「よき友」の三つには賛成しかねます。「ものをくれる人」はその見返りを求めないで純粹に施すことに喜びを感じる人なのでしょうか。「医師」は病める人の身と心の苦痛を和らげてくれる人なのでしょうか。「知恵ある人」は全ての人に共通の慈悲ある知恵を示すことができる人なのでしょうか。

前号で「今私には善知識と呼べるよき友がいる」と書きました。彼は末期がんの患者で5月に病院からは見放され、歩くこともできなくなり、在宅医療で最後を待つばかりだったのです。そんな状態の彼が、あるきっかけで自ら「生死不二」を明らかにして以来、介護する奥さん共々見違えるほどに心安らかな毎日を過ごすようになりました。注2 つい一週間前には彼は約束通り私に焼き肉をご馳走してくれました。杖をつき支えられながらの歩行ですが、車からお店まで歩くことができるようになり、ランチの焼き肉セットをデザートアイスクリームまで残さず平らげたのです。その時彼が話してくれた話には私は衝撃を受けました。

在宅医療は2週間に一回医者がやって来ます。末期がんの患者には治療方法はもうないと思っているのか、軀を触診するわけでもなくパソコンに向かって二言三言何か喋って5分あまりで帰ってしまい、翌日奥さんが2週間分の薬をもらいにその医者の病院に行く繰り返しの2週間です。ある日彼はまた歩けるようになったので往診ではなく病院で診察を受けたい、薬も以前の病院では一ヶ月分もらえたのでその様にして欲しいと要望しました。これは歩けるようになったのでたまには外に出たいという気持ちとともに、年金生活者の夫婦にとっては切実な医療費の問題でもあったのです。具体的な金額を聞くと2週間毎の往診の医療費と交通費は大変な負担です。これが1ヶ月毎に本人が病院に出向くことが可能であれば相当軽減できます。これは自分の軀が動く間は外の空気を吸いたいという生きる意志と、経済的観点からあたり前の要望に思えます。

医者はその話を聞いて余り良い顔はしなかったようですが、彼は往診を一旦中断して貰いその医者の病院へ受診に出向きました。そこで彼と奥さんが言われたことは私は二人からの又聞きなので正確に書くことはできませんし、言った言わない、そんなつもりで言ったわけではないとなりがちな話なのでやりとりは書きません。ただ彼らがその医者から受け取った意味を要約すると「なんで医者の指示に従わない、いつ死んでもおかしくないんだから勝手なことをするな。今度歩けなくなったらどうするんだ。うちがいやだったらよその病院に行けばいい」ということ。二人は今までのいろいろな医者に見て貰ったがこんな言葉を浴びせられたことは初めてだと、とても悔しそうに話しました。ただ残念なことに彼らは大病院からは治療の方法はもうないと言われ、経済的にも終末ケアを手厚く受けられる施設に入ることもできず、最後は在宅医療に頼るしか方法がないのです。だからまた歩けなくなったらこの医者に往診に来てもらう選択肢以外ないのです。

私は彼が自らの意志でまた歩くようになり、床屋に行きたい、一緒に焼き肉を食べに行こうと言われたときは心底嬉しく思いました。「それではいつ行きますか、何時に迎えに行きますね」となっても「転んだら危ないからやめておいたほうがいいですよ」という話にはなりません。一時とはいえここまで回復したことを喜び、生きる意志を尊重して出来る限り応援したいと考える方が自然な反応だと思います。でもそれは医療の立場から見ると間違った考えなのでしょうか。患者の意志が尊重されるのではなく医療の意志が優先されているように見えますが、それともそれは現在の彼の主治医の特殊な考え方なのでしょうか。

私はこのところ「生死不二」について書き綴っています。それは「死の側から生をみる」ことでもありと書きました。ところが医療は生の側からだけしか死を見ようとしません。物理的な肉体の生を維持することしか念頭になくその肉体が心によって動かされているということを考えようもしないのです。「生死不二」を悟っている彼は、肉体の生死へのこだわりを解き放ち心の自由の中で現在の「生死」を見ているわけですから主治医と意見が合うはずありません。幸い彼は悔しそうにこの話をしても、落ち込むそぶりもなく気持ちは穏やかで晴れやかです。「生死不二」への厚い「信」を私はそこに見ることが出来たのです。

兼好の言う「よき友」が私の考える「すべての人の苦痛を取り除き慈悲とありのままに観る知恵を与えてくれる友」であるならばそれは人々の苦痛を取り除く医師、つまりお釈迦様そのものです。私は善知識の皆とともにお釈迦様の道を辿り、私が皆の「よき友」であることを願い誓い行う 琉游舎：戸井 出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152
矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850